

紹介

東野治之・小林達雄・青柳正規・田中淡・千田稔・武田佐知子・山中敏史・菊池俊彦・甲元眞之・上原真人・岡村秀典著

『考古学の学際的研究―濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ―』

濱田青陵賞は、日本における学術としての考古学の開祖として偉大な足跡を残された濱田耕作博士の業績を記念し、没後五〇年にあたる一九八八年に、出身地の岸和田市と朝日新聞社の共同主催で創設された。

狭義の考古学に限らず関連諸分野も含めて優れた業績と将来性をもつ五〇才以下の研究者を対象とし、初回以来の受賞者のうち一一名による書き下ろし論文集である。

まずは各論文の題目と執筆者を掲げる。
1 天寿国繡帳の制作年代―銘文と図様からみた―（東野）

2 紐を手繰りて縄文世界―縄文時代における紐・糸・縄・綱―（小林）

3 カツアネツロのローマ時代別荘遺構の

年代について―中部イタリアの住宅建築研究―（青柳）

4 中国建築の知識は如何なる媒体を通じて日本に伝えられたか―工匠、模型・図面そして書籍―（田中）

5 わが国における方格地割都市の成立―朝鮮半島との関連で―（千田）

6 大化の冠位制について―吉士長丹像との関連で―（武田）

7 評制の成立過程と領域区分―評衙の構造と評支配域に関する試論―（山中）

8 夜叉国へ至る道―七世紀の北東アジアの歴史と地理―（菊池）

9 中国新石器時代の貝の採取活動―採貝活動の多様な目的―（甲元）

10 東大寺法華堂の創建―大養徳国金光明寺説の再評価―（上原）

11 倭王権の支配構造―古墳出土土器の象徴性―（岡村）

いずれも要を得た副題が添えられ、対象とする時代や地域が知られよう。それぞれ考古学・文献史学・歴史地理学・美術史・建築史各分野の高度な専門性を有する実証的研究であり、総体として十分に「学際的研究」にふさわしい内容を備えている。

では、個別論文は専門的すぎて学際的でないのかというと、決してそうではない。

文献史分野でいえば、東野氏は、天寿国繡帳に関して、既往の銘文研究を十分に咀嚼整理したうえで、図様モチーフの精緻な分析と関連物質資料をひろく渉猟する。文献史の堅固な基礎と、美術史・東洋史・考古学・染織史などの該博な知識なくしては不可能な作業であろうし、各分野専門者の評価も楽しみなどころである。また、服装史を専門とする武田氏は、列島のみならず漢籍からの論証も駆使し、東野氏が別論で下した吉士長丹像の評価に異を唱える形で大化期の冠と冠位制を検討する。そして、山中氏は発掘データや歴史地理学の成果を十分に活用して評衙の成立と変遷を論じ、律令国家の領域支配の実態に接近する。

歴史地理学では千田氏の論文がその範疇になろうが、朝鮮半島とくに高句麗や新羅の都城と列島の宮都と方格地割を、当時の政治情勢や思想的背景をふまえて関連づける内容は、その枠にとどまらない。また、北東アジア史の菊池氏も、漢籍にみる夜叉国の位置比定を試みるなかで、オホーツク海沿岸の発掘データから文化内容を復元し、

交流ルートの問題も同時に解決している。

考古学の小林・甲元・上原・岡村4氏の論文もそれぞれに個性的な深さとひろがりをもつ。小林氏の「紐の結び目」研究は、出土資料や圧痕のほかに多くの民俗例を扱い、縄文世界の意思表示手段の解明という新境地を予見させる。甲元氏の中国新石器時代出土品の包括的資料収集と生態学的検討も、今後の基礎となる重要な業績といえる。上原氏による恭仁宮式文字瓦の印面変化分析とそれに立脚する東大寺法華堂創立年代論は、まさに歴史資料としての瓦研究の醍醐味を堪能させてくれるが、文献史料による裏付けと時代背景への冷静な洞察が説得力をもつて迫る。年代論以外にも内容は多岐にわたるが、批判の俎上とされた川瀬由照・吉川真司両氏をはじめ、文献史・建築史をまじえた今後の論戦が期待される。岡村氏の論考は、中国史料・日本神話の構造分析をふまえて、古墳出土祭器・宝器の時空間的な役割変換のプロセス解読を試み、そこに倭王権が地方支配の正統性を表象した構造を読むという極めて意欲的なものである。あまたある学史を十分にふまえながら、文献史学と考古学という枠組みを

越えた地平の展開が着実に予感される。

建築史の田中氏は、古代と近世にいたる大陸からの建築知識導入を多くの実例で示されるが、文献史料や絵図の分析も豊富に盛り込まれ、外来文化受容過程のすぐれた論考となっている。また西洋古典考古学の青柳氏は、自らが実施しているタルクニアのローマ時代別荘の発掘調査成果を報告するが、政治・経済的な時代背景もあわせて詳述され、西洋古代史・美術史の基礎資料として今後十分に活用されよう。

かように個別論文も、軸足を各分野にしっかりと据えながら存分に学際的である。そもそも「学際的」なるジャンルが当初よりあるわけではなく、探究心に応じて必要な史料・資料に拠った結果がそのような内容につながるのだらう。とはいへ、それぞれの分野には、長い研究史に培われてきた固有の手法があり、史料・資料の特質も異なる。本書の各執筆者は当然そのあたりを十分にふまえて越境しているけれども、各分野専門家の立場からも真摯な検討と批判が加えられ、相互に高め合うことが、学際的研究にふさわしい本書の活用法と思われる。個人的資質だけによる学際的研究は

「すごい」のひとつでその人物とともに終わるが、エキスパートの競合によるそれは無限の希望と可能性を周囲に与えてくれる。勿論、本書は後者の部類に入る。

最後に、本書の学術的価値には何らかかわらないが、若干の個人的不満点を掲げる。まずは本の表題。考古学も、固有の方法をもつ科学として学際的研究の一翼を担うと考えるならば、「考古学の学際的研究」という表題はいかがなものか。本書の内容すべてが考古学の範疇であると考えるのにはためらいを覚える。また、明らかに天地逆の挿図や(七一頁)、庶民には嘆息を禁じ得ない価格も、概説書での普及啓蒙に意を払われ、発掘報告書の図版の意義を説かれた濱田博士を記念する書物としては残念である。そして、すぐれた成果を国際的に発信してより実り多くするために、英文・欧文・中文・ハンゲル等のタイトルや要旨を付す試みがあったならば、などと考えるのは欲張りすぎだろうか。

(A5版 三六一頁 二〇〇一年一〇月 岸和田市・岸和田市教育委員会発行 昭和堂 一一〇〇〇円)

(伊藤淳史 京都大学埋蔵文化財研究センター助手)